

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その3）

古瀬 敏、根本敏行

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第10巻 2010年3月

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その3）

Practicing Universal Design in the Community (Part 3)

古瀬 敏
デザイン学部空間造形学科

Satoshi KOSE
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

根本 敏行
文化政策学部文化政策学科

Toshiyuki NEMOTO
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

ユニバーサルデザインの理念を地域に根付かせてそれが具体的な実践につながるにはどうすればいいだろうか。これまで何年かにわたって米国などでユニバーサルデザインを推進してきた専門家を招いて講演会などを企画してきたが、平成20年度にはセンターフォアユニバーサルデザインでユニバーサルデザインの父と呼ばれたロナルド・メイス教授を支えてきたレスリー・ヤング女史にお話をお願いし、関係組織からの情報提供と合わせて有用な情報を得た。なお、本報告は平成20年度の文化・芸術研究センター長特別研究報告として位置づけられる。

What can be done to implement the concept of universal design in the community, not just in words but in action? The authors have tried for the past several years to organize lecture sessions with invited speakers from the States and UK, and in 2008 the invited speaker was Ms Leslie Young, who has worked with late Professor Ronald Mace at the Center for Universal Design from its establishment. Her lecture gave new insights into the realization of universal design.

はじめに

今年度は静岡県がユニバーサルデザイン室を設置してから10年目ということから、この間にどれだけユニバーサルデザインが普及したかを見直すことを意図して、「しずおかユニバーサルデザイン国際シンポジウム」が静岡県と静岡文化芸術大学との共催で、11月13日と14日に行われた。本特別研究ではその実施を研究活動の一環として位置づけることになった。

シンポジウムでは、県が行政として行ってきたことを振り返るというよりは、民間がどのくらいまでユニバーサルデザインの理念を踏まえて動きつつあるかを見つめようということで、シンポジウムの企画としては地元企業の取り組みを紹介しながらさらに推進するきっかけづくりを目指した。もちろん、県が行ってきたこと、そして静岡文化芸術大学が地域に関与していることについてはパネル展示などで情報を提供した。

初日は基調講演として大宅映子氏に「誰のためのデザインか」と題して辛口のお話を依頼、また米国から記念講演者としてユニバーサルデザインの父と言っていい故ロナルド・メイス教授とともに研究所でずっと仕事をしてきたレスリー・ヤング女史を招いて、「ユニバーサルデザインの到達点と今後」についての講演を実施した。

これらの講演と組み合わせて、地元そして日本での成果を事例として紹介する発表をパネルトークも含めて設定して議論を行った。また2日目にはワークショップを設定し、地元企業であるヤマハ株式会社とヤマハリビングテック株式会社での製品開発をテーマに議論を行った。さらに希望者には、午後の時間を用いてユニバーサルデザイン関連施設の見学が設定された。これまで本学で実施したユニバーサルデザインのシンポジウムでは、ワークショップは人手の関係などもあって行えなかったのが、参加者はどちらかといえば受け身という感じだったが、今回は積極的な参加の場を提供できたと考えている。

本研究の一連の流れの中で、これまで何度か米国と英国から専門家を招き、ユニバーサルデザインの理念と実践を県民に紹介してきたが、今回はとくに多様な内容が含まれており、全体を通して見ると、フォントデザインから住宅関連製品、自動車、住宅、そして公共交通機関まで、さまざまな局面でユニバーサルデザインがどのように考えられ、どのように実現されているかを参加者に伝えることができたと考えている。

ユニバーサルデザインの原点から見直す

今回招いたレスリー・ヤング女史は、現在はノースカロライナ州立大学付属のユニバー

サルデザインセンターを離れてしまっているが、同センター設立以前からメイス教授のもとでユニバーサルデザインの仕事にずっと携わってきた。同教授が亡くなったあとも、センターの活動を支えてきたが、センターの運営が次第に本来の方向からずれてきたという事情から、センターを離れたということである。今回の講演では、在籍中にメイス教授といっしょにユニバーサルデザインの事例を分析した連邦政府からの委託研究報告書からいくつか選んで重要なポイントを説明してくれた。これまでの公刊されたさまざまな書籍や報告書などで、実例分析を行いながら全体を通してユニバーサルデザインのあるべき姿の議論をしているものはじつはあまりなく、またこうした報告書の内容を説明するのはなかなか作成当事者以外はやりにくいということもあって、米国から今まで紹介されることもなかったので、いい機会だったといえよう。

なお、ユニバーサルデザインセンターの成果物として、下記の2つが参考になる。いずれも Web アドレス

http://www.design.ncsu.edu/cud/pubs_p/pud.htm からダウンロードできる。

A) Case Studies on Universal Design, 1998

B) The Universal Design File: Designing for People of All Ages and Abilities, 1998

上記の報告書では、製品から建築、公共交通機関などがカバーされ、それぞれの事例について議論がなされている。ユニバーサルデザインとして成功に至った比較的共通な要点を挙げると、以下のとおりであるとまとめられている。

- 1) 関係者の個人的コミットメントは大きい：それをやらなければならないという固い決意を持つと、通常では突破できない周りの逡巡を吹き飛ばせる可能性が大きいということである。
- 2) ADAのインパクトは大きい：これは米国の事例ということから出てくるわけだが、法律が規制していると最低限やらねばならぬことが見える。それ以上を目指す場合も目標が設定しやすいといえる。
- 3) 外部コンサルタントの利用：内部だけで

は突破しにくい場合、第三者の立場からの報告があると、組織内での説得がやりやすい。

- 4) 必ずしもUDを事前に知っていたわけではない：「ユニバーサルデザイン」ということばや概念の知識がなくとも、その理念を理解していれば成果が達成される。ときには成果を見て外の人がそれはユニバーサルデザインだ、と指摘されることもありうる。
- 5) コスト感覚は消費者製品では重要：値段が高くても売れる、ということはあるが消費者製品の宿命であろう。1セントでも安い物を、という消費者の一般的購買動向は侮りがたい。
- 6) 「障害者・高齢者向け」という概念はじゃま：ユニバーサルデザインは対象を特定しないわけであり、自ら利用者層を絞り込むような発想は逆効果になりやすい。実際にそのようにして失敗した例も少なくない。
- 7) 市場一番乗りは広報面で有利：一番乗りであれば、対外的に広報発表がなされた際に、広告を申し込まずとも経済面、あるいは社会面で記事として取り上げられる可能性が高い。これは信憑性が高い情報として社会的に評価してもらえるので、よりいっそう効果がある。

以上の各項目は、日本の事例を思い浮かべるとほぼ該当するものが見つけれられる。もちろん、国情の違いがもたらす差異もあるので、一概にはいえないが、ユニバーサルデザインを意識して何かを打ち出そうとする際には有用な物差しになるであろう。

トイレのあり方について

昨年度の本報告で言及したトイレのユニバーサルデザインに関する議論は、2009年4月初頭にロンドンの王立芸術大学で開催されたInclude2009で論文として発表した。また、関連報告として、2009年5月にハワイのホノルルで行われたPacific Rim Conference on Disabilitiesでポスター発表を行った。トイレ事情は国によって大幅に異



レスリー・ヤング女史の講演。手話通訳がついている。



講演後、対談時のレスリー・ヤング女史

なっているものの、あってほしい姿はさほど
変わらないこともあって、それなりに参考にな
るコメントなどが得られた。なお、コンビニ
エンスストアの現在について記述した書籍が
最近出版されたが、そのなかには興味深い事
情が書かれている。

おわりに

2010年10月には、浜松市において第3
回国際ユニバーサルデザイン会議が開催され
る。2002年から4年ごとにわが国で開催さ
れてきた会議は、その間にどのくらいユニ
バーサルデザインが進んだかを検証する場で

ある。各所での取り組みを見つつ、自らが何
をなすべきなのかを振り返る場とすることが
求められよう。

参考文献

Kose, S. (2009) How can we assure that everyone
will have a toilet s/he can use? *Include 2009
Proceedings*, London: Royal College of Art
(ISBN 978-1-905000-80-7), 6 pages.

Kose, S. (2009) Can you find a suitable toilet when
you are somewhere outside? Presented at the
Pacific Rim Conference 2009, Honolulu, Ha-
waii, May 2009.

鷲巣力 (2008) 公共空間としてのコンビニ、朝日選書

